

# 日吉ダム天若湖における行事支援体制

里西 星哉<sup>1</sup>・木村 数也<sup>2</sup>

<sup>1</sup>独立行政法人水資源機構 日吉ダム管理所 総務担当 (〒629-0335京都府南丹市日吉町中神子ヶ谷68)

<sup>2</sup>独立行政法人水資源機構 日吉ダム管理所 所長代理 (〒629-0335京都府南丹市日吉町中神子ヶ谷68)

## 論文要旨：

日吉ダムの天若湖では、毎年6月はじめに「天若湖アートプロジェクト」が開催されている。2020年、2021年はコロナ禍により通常通り開催できなかった。このため、2020年はオンラインによる過年度実施分の振り返りイベントを行い、2021年は灯り設置箇所を限定し、作業手順等の技術伝承に主眼を置いた対応をとってきたところである。本稿は、2021年に実施した技術伝承の様子をとりまとめることで、今後も継続して実施していくにあたり、経験の有無に限らず日吉ダム職員が円滑に作業できるよう、その指針となることを目指すものである。

キーワード：湖面利用、技術伝承、協働、つながり

## 1. はじめに

### (1) 日吉ダムと天若湖

日吉ダムは、淀川総合開発の一環として淀川水系桂川に建設された多目的ダムであり、1998年4月に管理を開始している。1993年に「地域に開かれたダム」に指定され、堤体内には一般開放施設を有している。また、下流には道の駅が整備されており、レストラン、野菜直売所、温泉などがある。令和4年度からは、キャンプ場にアウトドアブランドとのコラボエリアが誕生したこともあり、休日はより多くの人で賑わっている。

天若湖については、2004年4月に「日吉ダム湖面利用計画」が策定され、釣り、化石燃料を使用しないボート、カヌー等を主な利用対象としている。

### (2) 本稿の方向性

経緯については後述するが、「天若湖アートプロジェクト（以下「プロジェクト」という。）」は、かつて天若湖周辺地域に存在していた集落の世帯を灯りで再現したうえで、その灯りを湖面に浮かべるといったものである。2005年度に1回目が開催されているので、2021年度で17回目となった。

当プロジェクトの実施に携わる学生や日吉ダム職員は、数年もすれば卒業や人事異動で入れ替わってしまう。水源地域への感謝の気持ちを醸成したり、流域住民間の相互理解を図るうえでは、プ

ロジェクトを継続して実施していくことに意義があるといえる。作業手順を把握しているメンバーが、都度その技術を次の世代に共有・伝承していく必要がある。とりわけプロジェクトのメインプログラムである「あかりがつなぐ記憶」のみに絞って、作業手順の技術伝承を行っている状況にあるということで、以下その様子を取りまとめることにする。

## 2. 経緯

### (1) 発端

日吉町（現南丹市）では毎年秋に「水の杜フェスタ」というイベントが実施されており、2004年度の同イベントは湖面利用計画が策定された直後の年にあたるということで、湖面利用アイデアコンテストが行われた。そこで「湖面に集落のあかりを灯す」という案が出たのが、プロジェクトの発端である。

### (2) 趣旨目的

現在天若湖となっている地域には、かつて桂川とともに生きた、豊かな文化をもった村があった。プロジェクトは、水没地域・地元・流域住民がともにこれらの魅力に触れる機会を、アートにより創出することを目指している。湖面を中心に広がる風景を舞台にしてアートを展開し、地域固有の魅力・課題を感じて考える機会を創出することが、

上下流双方の人々に共感を生み出すという理念がある<sup>1)</sup>。

(3) 実施主体

天若湖アートプロジェクト実行委員会は、市民団体及び NPO 法人が中心となり、そこに大学や日吉ダム等が協働する構成となっている。

これまでその中心となってきた二団体は以下のとおりである<sup>2)</sup>。

a) 「桂川流域ネットワーク」

2003 年に琵琶湖淀川流域で開催された「第 3 回世界水フォーラム」を契機に、淀川流域においても上下流交流の動きが起こり、京都府と NPO 法人「世界水フォーラム市民ネットワーク」により「桂川上下流交流事業」が実施された。桂川上下流交流事業は、桂川流域の各地域にスポットを当てて、そこでの「水と人の暮らし」を広く紹介し、共感の輪を作り出そうとするものであった。

世界水フォーラム終了後も、桂川上下流交流事業は「桂川流域ネットワーク事業実行委員会」に引き継がれ、組織はその後「桂川流域ネットワーク」に改称された。

b) NPO 法人「アートプランまぜまぜ」

NPO 法人「アートプランまぜまぜ」は、芸術活動とまちづくりを融合するイベント支援のために、2002 年に設立された。この NPO は、「アートが生活とまぜまぜになってみんなのものと言える世の中を作りたい」という考えのもとに、アートと市民が出会う場所づくりを提供する活動を行っている。

(4) 「あかりがつなぐ記憶」

プロジェクトでは、過去にピクニックや写真展、ワークショップ、筏イベント等様々なプログラムが実施されてきていた。中でも毎年継続されているメインプログラムが、湖面に灯りを浮かべる「あかりがつなぐ記憶」である。

日吉ダム完成に伴い水没した世帯を、太陽電池式ガーデンライトを湖面に浮かべることにより再現するというアートである。

実行委員会の構成は表-1 のとおりである。

表-1 構成

主催	アートプロジェクト実行委員会
共催	桂川流域ネットワーク（プロジェクト開始当時）、アートプランまぜまぜ（同開始当時）
後援	京都府、南丹市、南丹市教育委員会
協力	世木地域振興会、独立行政法人水資源機構日吉ダム管理所、摂南大学、道の駅スプリングスひよし

(5) 昨今の状況

2020 年度、2021 年度はコロナ禍により、通常通り開催することができなかった。2020 年度は、web 会議ツールを用いて、過去に実施してきたプロジェクトの映像を振り返りながらのディスカッション、また、写真-1 にあるように、学生の撮影による天若湖の中継映像放映を行った。



写真-1 令和 2 年度

2021 年度は、「あかりがつなぐ記憶」のみの実施とし、灯りの設置箇所を限定したうえで、作業手順の技術を伝承するという形をとった。通常通りの開催のめどが立たない中で、実施メンバーである学生及び作業のサポートを行う日吉ダム職員の入替わりが進むと、プロジェクトの継続が困難になってしまうためである。

3. 2021 年度の実施状況

日吉ダムの水没集落のうち、貯水池内にある宮村（23箇所）、世木林（29）、沢田（11）、楽河（11）、上世木（35）地域に灯り設置を行ってきており<sup>3)</sup>、図-1 のとおり 2021 年度は沢田、楽河地域に絞って、設置作業の技術伝承を行った。

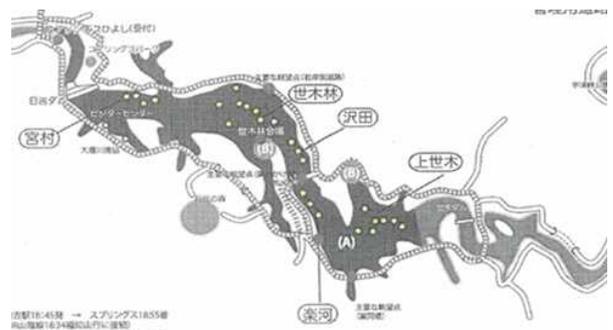


図-1 灯り位置概況

(1) 設置

設置箇所を分類すると基準点、屈折点及び独立点となり、日吉ダムで事前に浮きを設置しておく。

当日学生が、日吉ダムが事前に設置した基準点と屈折点の間にロープを張り、基準点、屈折点、独立点に加えて、ロープを張った基準点と屈折点の間の残りの箇所に灯りを設置する。

灯り設置位置図の例は図-2のとおりである。

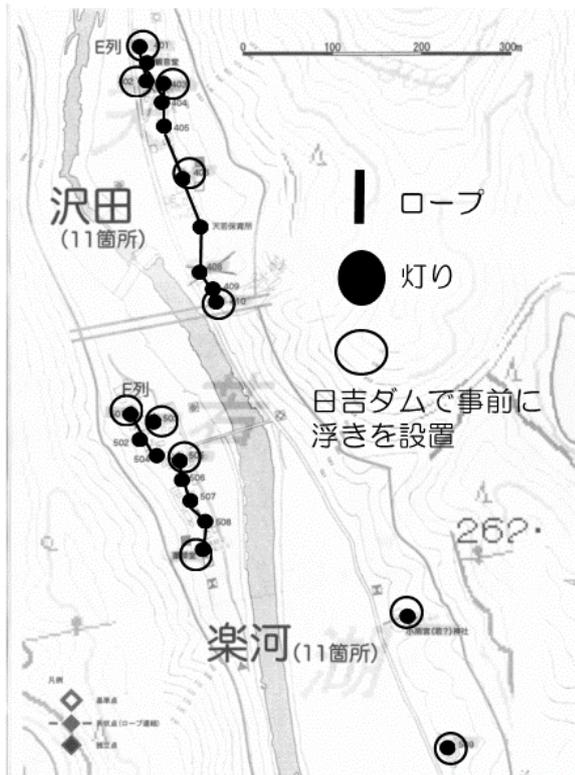


図-2 灯り設置位置図（沢田、楽河）

(2) 段取り

具体的な作業を行うにあたり、主に必要となるのは作業船、車両、ペットボトル、トラロープ、重石である。

日吉ダムにおいて事前に行う、ペットボトルの浮き設置の行程は、参加できる職員、天気などの都合を考慮して、数日に分けて行うこととなり、大まかに整理すると表-2のとおりとなる。

表-2 行程

9:30 (1日目)		防災資料館 重石積み込み
		事務所へ移動
15:00		ペットボトル浮き・重石を玄関ロビーに準備
16:00	終了まで	ペットボトル浮きの数量等確認及び補修作業
9:30 (2日目)	終了まで	ペットボトル浮きの数量等確認及び補修作業

13:00 (3日目)	終了まで	貯水池内点検及び GPS 操作確認
13:00 (4日目)		乗船準備
船舶班 13:15	13:30	A班：作業船（沢田） 世木林に向けて航行、 着岸 B班：作業船（楽河） 世木林に向けて航行、 着岸
13:30	終了まで	A班・B班 重石、ペットボトル浮きの積み込み作業開始
陸路班 13:15	13:30	ペットボトル浮き、重石をトラックに積み、 世木林に向けて出発
		ペットボトル浮き設置 作業後事務所へ

設置に至るまでに、水管理担当者との貯水位の確認、設置回収計画の作成及び職員への周知を行う。

計画を作成するにあたっては、主な作業として重石と浮きの数量等確認及び補修作業、貯水池内点検及びGPS操作確認が挙げられる。

数量の確認・補修作業では、重石とトラロープ、ペットボトルを、S字フックを用いて繋げておく。

灯り設置作業では、あらかじめGPS装置に世帯の座標を登録しておき、貯水池にてそのGPS装置を参考に、作業船で移動しながら重石を沈める。そのためには、水管理担当者とあらかじめ確認した当日の貯水位に合わせて、事前にロープの長さを調整しておく必要がある。

(3) 当日

学生が写真-2のとおり灯りを持ち込むので、ともに作業船に乗り込み、その指示のもと作業船を移動させて灯り設置をサポートする。



写真-2 学生持込の灯り

日吉ダム職員の作業としては、世木林でのテント等荷下ろし、テント設営作業、作業船の移動、関係者とともに灯りの設置、テント等撤去となる。

#### (4) 撤去

船舶班と陸路班に分けて記載すると、前者は、2隻の作業船で世木林まで向かい、関係者とともに灯りの回収作業を行う。灯りを回収した後、ペットボトル浮き、ロープ、重石を回収する。

後者は、世木林まで移動ののち、引き上げたペットボトル浮き、ロープ、重石をトラックに積み込んで事務所に持ち帰る。持ち帰った後、清掃（水洗い）し、個数の確認や補修作業を行い、元の場所に戻しておく。

## 4. 反省

### (1) 設置

作業船での重り等設置作業について、船の操縦者とGPS操作者、重石等投下者を分担して行った。それぞれが行う作業について、事前に行った貯水池内点検において段取りを把握したうえで取り掛かったため、実際に作業する際に円滑に設置することができた。

ところが、分担した作業船での各作業について、交替して行わなかったため、知識が偏ることとなった。技術伝承という観点から考えると、各作業をどのメンバーでも行える状態にすることが望ましい。

### (2) 撤去

重石等の回収作業において、ロープが作業船のプロペラに絡まってしまった。外れなくなった時を想定して、今後はロープを断ち切れるものを用意する必要がある。その際には、重石が貯水池に沈んでいかないよう、前もって引き上げておくことも必要である。

### (3) 士気

2021年度に行った作業について、手順の引継ぎに重さが置かれすぎたため、プロジェクトの趣旨や意義が職員へ十分に周知されないまま技術伝承を行った。何のために作業をしているのか、動機の部分で一体感がなかったために、作業の負担感が多く残る形になった。

あらかじめ、プロジェクト、とりわけ「あかりがつなぐ記憶」を、日吉ダム職員として継続して行っていく意義を見失わないようにしたい。

## 5. おわりに

より良いダム管理を行っていくうえで、「水源地域への感謝」は大きなテーマとなる。今後も継続して実施していくことで、少しでも多くの人がプロジェクトの存在自体、そして中身を知るようになれば、それは水源地域について考える契機となる。水源地域、受益地域など様々な立場の人が、自分なりの感じ方でひとつのアートに触れる貴重な機会を提供できるよう、ダム管理者として今後も可能な範囲で協力していくことができれば幸いである。

### 参考文献

- 1) <http://amawaka-ap.com/concept.html>  
(天若湖アートプロジェクトホームページ  
2022.10.27 最終閲覧)
- 2) 浦川裕次郎, 2007, 「日吉ダムの湖面利用の新たな取り組み」 独立行政法人水資源機構関西支社編『平成19年度水資源機構関西ブロック技術研究発表会資料集』
- 3) 田中さおり・西村明・宮前武利・小野寺直, 2010, 「天若湖アートプロジェクトへの協力支援と日吉ダムPR」 独立行政法人水資源機構編『平成22年度水資源機構関西ブロック技術研究発表会資料集』